

定されず、より共通で、絶対的なものであるほど、神についてより本来的な意味において我々によって語られるのである」(S. *th.* I, 13, 11 c). (矢玉 俊彦訳)

## 提 題 R・ベイコンにおけるレトリカとポエティカ

日 下 昭 夫

「バベルの塔」をめぐる「ことば」の問題は、ダンテもこれを取り上げていることはよく知られている。人祖アダムに神が直接与えた「自然で普遍的な言語」は、「バベルの塔」の崩壊を機に消滅し、混乱に続いて「言語の分化」が起り、「さまざまな言語」が生じた。そうした言語は、「自然で普遍的な言語」とは違って、自然ではあるが個別的たらしめるを得なかった。「高貴な言語」(vulgare illustre)は、さまざまな言語の復帰すべき、ダンテの描く理想的な言語像だった。ロジャー・ベイコンもそのダンテに先立って、「言語の分化」に伴うさまざまな言語活動に注目し、ラテン語以外の言語(特にヘブライ語、ギリシア語、アラビア語)習得の必要不可欠な所以を強く訴えていた。ベイコンによれば、「神的なことがら」・「人間的なことがら」を問わず、それを知るのに不可欠な学が五つある。その第一が「文法」で、それはラテン人の知恵の源泉たる「さまざまな外国語(linguae alienae)に開陳されて文法」とされている。さまざまな言語の学習には、それぞれの言語に固有な「文法」こそ手引きたり得る道理だが、ここにいう「文法」とは、さまざまな言語に共通な単一の「文法」だったようである。事実、「文法」はそれ自体としてはすべての言語にわたって同一であり、相異しているとすれば、付带的にそうであるに過ぎない、と彼はいう。その限り、いわゆる Grammatica speculativa に形式的には連がると思われもしよう。もっとも、Grammatica speculativa に対する Grammatica positiva(いわんや「高貴な言語」)を構想するまでには至っていない。

ベイコンにとって「文法」は「論理学」(Logica)ともども哲学の「付帯的な様態」(modus accidentalis)でしかなく、両者ともに哲学の「本質的な様態」のひとつ「数

学」ないしその一端たる「音楽」に依拠するものであった。「論理学」についてこれを見れば、その目的とするところは「実践的知性を来るべき幸福への信仰と愛に向けて動かすような議論 (argumenta) を構成する」にあり、その議論は「人間の精神が、救いに結びつく諸々の真理へと即座に奪取・吸収されるよう、この上もなく美しくなくてはならない」。その言説はまた「時と場所と聴衆、それに説得すべき内容に応じてそれなりに荘厳で優美でなくてはならず、散文、韻文、音律で飾られ人目を惹くものであることを要する」。「論理学」は、その目的という視点からこれを見るとき、「レトリカ」「ポエティカ」そして「音楽」(「数学」の一部門としての)を含み、鮮明な一線で結ばれてもいるのである。

ところで「実践的知性を動かす議論」であるが、いうまでもなくこれは「思弁的知性を動かす議論」——「弁証的議論」(argumentum dialecticum) と「論証的議論」(argumentum demonstrativum)——に対するもので、ほかならぬ「弁論的議論」(argumentum rhetoricum) がそれである。思弁的領域ならぬ実践的・道徳的領域におけるその役割は、ベイコンによれば、「弁証的・論証的議論」を無限に凌ぐものがあり、「弁論的議論」は一つで千の「論証」(demonstratio) 以上の価値を持つとされている。

その「弁論的議論」をベイコンは三種に分けている。①信仰に関わる事柄のいわば権威に訴えての説得と、②キケロに代表されるいわゆる法廷弁論、そして③人間行為全般を、救いに結びつく諸々の真理へと向ける態の説得がそれで、①②は端的に語られたレトリカと呼ばれ、③の議論は「弁論的」(rhetoricum) ではあるがアリストテレスならびにその註解者たちのいうように本来的には「詩学的」(poeticum) と呼ばれるべきものとされている。ベイコンにとってこの「詩学的議論」こそ真に道徳的・宗教的言説たるべきものであった。「弁論的議論」が神学に次ぐ最高の学たる「道徳哲学」(Philosophia moralis) に属するとされる所以であるが、にも拘らず「論理学」の一部ともされている。レトリカを, rhetorica docens と rhetorica utens に分け、前者が「論理学」の、そして後者が「道徳哲学」の一部たるべきことが主張され、特に後者にはアウグスティヌスに依拠するものとされている。

以上から、ながいレトリックの歴史のなかで、ベイコンの占める位置を考えるための一つの手懸かりが与えられればと思っている。

(提題者の希望により大会レジュメのみ掲載させていただきました)